官許

校正
増加

六諭衍義附錄

下之卷

ロ 9
3439
3上

明治
3439
巻 3

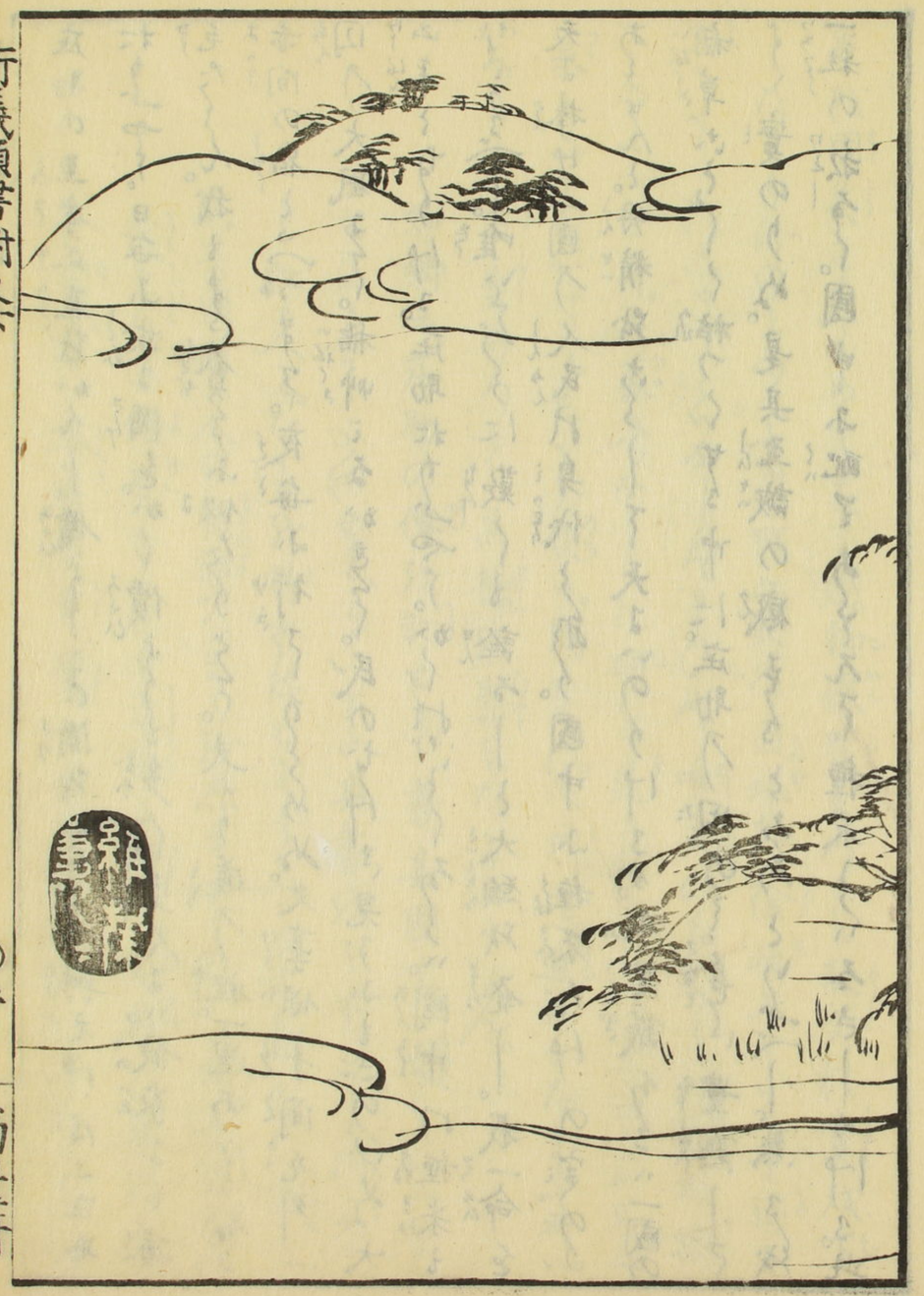
自書
画入

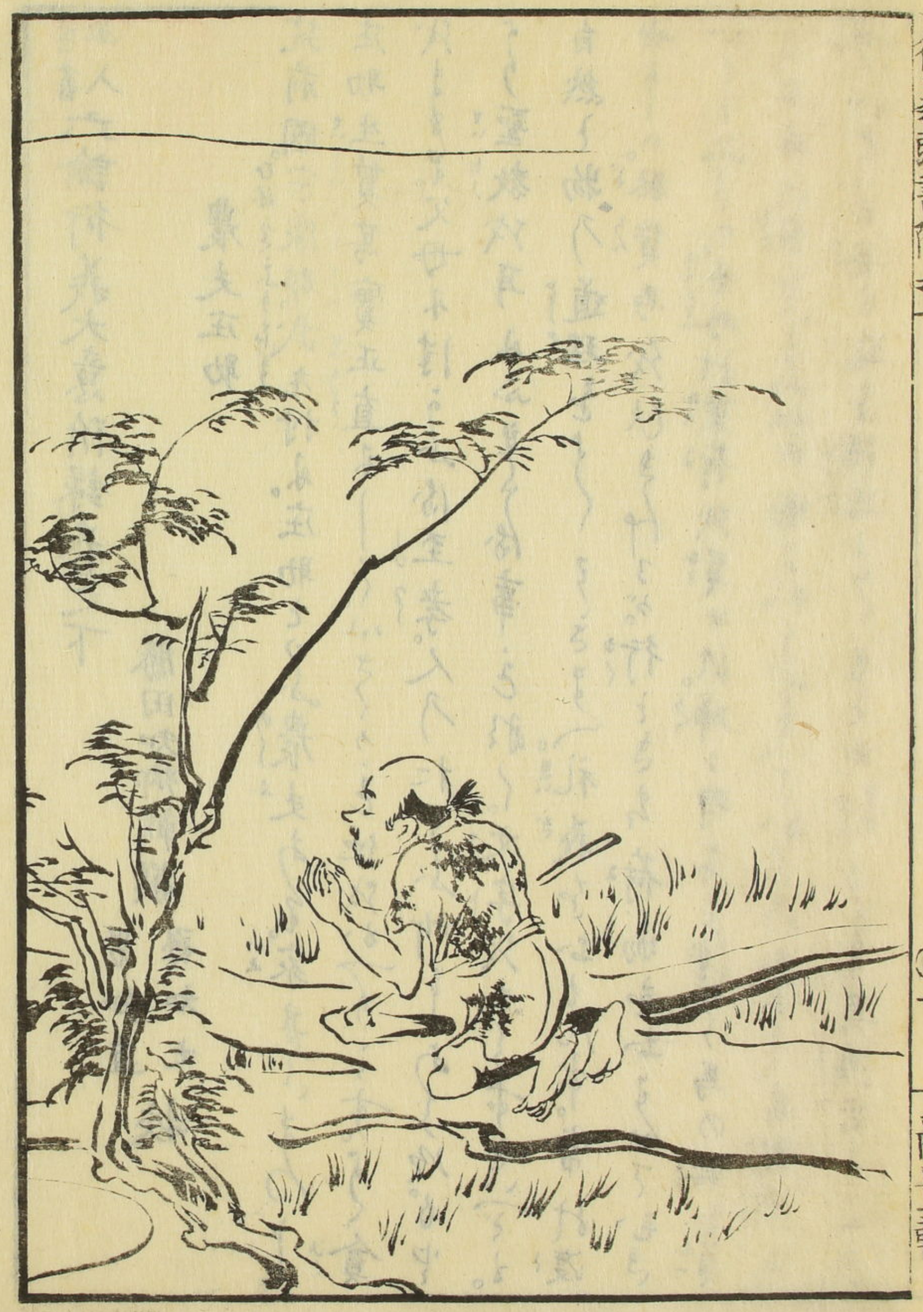
六論衍義大意附録巻之下

勝田知郷輯撰　男知直
孫知之　校

農夫庄助

筑前國。宗像郡。武丸村ゐ。庄助とゝふ農夫あるゑ。家甚しまゝし。庄助生質篤實正直ゐ。ゝ。ふさゝうを他ゝ残かゝりらず。ゝく貪ゝ残まゝゑ。父母ゐはゝうふ孝。人乃れしゝふ所ゝあゝ。ゝゑ。ゝうり聖教ゝ残耳ゐふゑゝゑ事を敬く。文字ゝ残きゝずとゝゝどゝ。自然と物乃道理をゝゝゝゝゝさゝゝ。礼義をおもんず。常ゝ渡世ゝゝゝ。駄賃馬ゝ残ひきゝけゝるゞ。行ときゝ荷物をおゝせてゝき〻〻とゝゝゞゝ。分外ゝ重荷ゝ残負せゝ。帰る時ゝゝゝゝ馬の鞍を負ゑ。其馬ゝ労をゝゝふ。仁の物ゝれゝふをゝゝかゝ乃ゞとゝ。其親酒ゝ残好ゝけゝ。日毎ゝ近ゝ酒店ゝゝゝもとめゝけゝゝ。其酒店ゝゝゝ。





庄助の至孝正直なかんじ。價うることを酒なおわ〳〵與えけなふ。庄助
はふやう〳〵。日毎ふ求る酒をかく價よりも多く愛んまい。彼家よりも損
毛たくん。我ままく貧くふ似たりとく。夫より道の程一里あまりある。
赤間の宿といふるまく。夜毎ふ行てすゝめ。又享保年間。九月一
日の大風ふく。稲艸こるかきく。民のなげき見るふもきのひめ大
山年くなりける。庄助はすふやう。かくはだ〳〵るく。國中は種米も
なこうゝ。唯いくづくに歎くも詮なしと大願なる。我一命を
天る捧げ。一國の人民は身代くあり。國中ふ種米だけの実のり
あくせんと。丹精なくして天まいのりけるが。不思議なるい。一國の
稲草。はく〳〵枯つくせる中に。庄助の田のく。甚く豊熟して
く實のりぬ。是其至誠の感なるとふべし。然るなる
一粒の私なく。國中ふ配をあくえて。種米くいるさしめける。此

事なる國矣きはしめしたまひ。御感賞あるく。数多は賞なる下
したまるふのくるくず。一町五反の田地なる。除地としく。子孫ふ
至るまく世はくるしたまひぬ。唯夫のくるくは。庄助病
く死しける時。其墓の不くるに碑を建させたまひ。孝子庄助之
墓と志るくれける。是より後い。國矣は此所を通くせたまふ時い。
かくくず下乗あるく。其德なる崇くたまふとなん。

知郷云。庄助の傳なる記せし書。其國まい專らおくるる
ものなるくくせと。予いまく其書なくず。こし漏見ま
くはるべど。たゞなる得ざるをくみくす。今ゆえに記し
い。其國の人の物語のまなる志るすのく。嗚呼至孝は
德。至仁の餘慶。なるのく子孫まは傳へ。早戦は身なる
文。國君の尊崇を受。實まありかくもかしこきかな。

中〳〵拙き筆ふいたりひかゝし。又爰ふとか〳〵重〳〵其徳を賞させたまひ。永〳〵其美を伝へたまひて。善を勧めたまふ。誰か善を願さんや。終に一國篤實正直の風俗に化し。民孝義を貴ぶに至りて。國淳朴徳行の人を生ずるに至るべし。此庄助の志ゝ。一文不通なれども。其行処聖賢の御意にかのふべし。然すれば。農商の書を讀。詩文を好む。多くは破産に至る。されば正直を守りて。よく真業をはゝむ事才一なり。志ゝ一又余暇ありて。よく學んでいよ〳〵其美をまなべし。必将樂翁君の仰せふ。百姓は多くは田地を下作もあさしむる者歟。町人は手代を多くめつかひ。別家も是ある者ゝ。つゞまる身の上相應なる者は。家業は暇あるべし。朱子の小學。近思録。

或は三體詩。古文真寶なるとの書を讀て。志かしあり深入いりぬる事也。此書物は幼年ゟ学ぶべきなり。隨分四十才以上なるとも。心ゆきもれば讀るものなり。實はかゝ仰なり。もし書を讀て。志の高くなりたくんば。自然と其家業を忘れやすしとなり。身分の高かん事を願ひ。終は金銀をもつて。高貴の家ゟ出入るし。素性いやしき身をかりるべし。格式をなまるべし。帶刀ゆるされて。人ゟ不ゟ至る者多し。かゝる者〳〵なる時は。分限ゟ應ぜぬ費用をもいとゝ。祖先以来累代相續せし身上も。忽ち破滅ゟ化し。終は道路ゟ食を乞ふいたる者多。是自然の理ゟ。たとへ高貴英傑なりとのうれたる事古人も論せり。因まゝゟ枝出す。

凡そ卑賤より起る槐位ふぼ〳〵なり〳〵人。ゑび〳〵終を全せずと。古人のいひ〳〵如く。地下より昇進せる〳〵人を考るに。清盛公登庸せ〳〵をえどめ。敏人の内。壽永の宗盛公。此人い傘張僧綱の子なるよし。盛衰記に見え秀次公い。尾張海部郡の人。弥助の子なるよし。豊臣譜に見え。秀頼公も。名古屋山三郎は子なるよし。塩尻に詳らう也。是らの人〳〵。皆白丈にふまて〳〵終り我全ふせ〳〵きず。豊太閤い。尾列中村郷の。筑阿彌の子とも〳〵。終に我全〳〵せるきし〳〵。如何ふと不審なり〳〵我。負徳翁の載恩記に詳らう也。又朝鮮へつかいせし〳〵書ふ。慈母夢。日輪入懐中而以降とい。是志ろ〳〵佛説ふな〳〵せ〳〵せとも〳〵。此説高貴の上をふるゝど。農商とい〳〵。其分を越て高ぶんとするい。

實學なる〳〵ふの弊也。こゝい身我おさめ。家をとゝのふるための學問いるすべし。文事の風流をたの〳〵み好むいゆり〳〵〳〵ぬかのなり。農商未一のたゝ〳〵い。御高札の表。地頭領主の教令我大切ふ守り。上我おそれ下をあはれむ。其身を慎ム。家業我よく〳〵守りまもれい。學文をしなるふ同〳〵かるべし。正宗れかし。持手ふよるといふ諺の如く。百姓町人あ〳〵學文するすゝ紀い。農商の道うるはしく〳〵れのふ心ふなり。人を侮り軽〳〵め。終に家をうゝのふよ至る。或書ふ。公家が哥よりも。武家が弓ゆみ。野ゝ焼松の肥とも〳〵と〳〵い。農家に生る。農の業我志べし。商家ふ生る。商家の道我辨えるい此類なり。惣ゝて歴〳〵の人い。相應ふ藝なるけるいなる〳〵ゆゑ。農商の藝な

きとく恥おいなすゝず。家業はたあらず。貧しくなるゝいさしー
當る恥なり。たゝ〳〵好形ばかりしても。悪敷形をしても。百姓も
百姓。町人は町人なり。いろ〳〵形はいろ〳〵なれども。心正しければ。
歴〳〵れ学文したると同意也。民家の学文は心ばかりにて
にせず。人の道如何なるものぞと。物しりにたつねて。よ
き人の教ばかりしー。あるべきまち。ばかりも聞あるも。忽ち其座を
改る。ばかり景上とす。是農商の学文也。〳〵。此説甚しく
浅近なりといへども。かつて其意味深し。又人君たる
御方は。此意をもつて教令をなし。志りて下の辛苦
の情をよく察して。仁政時雨の物ばかりなるべし。如く
なんぞは。聖人の政なるべし。たとへば水の義公。民の辛苦
ばかりしめされんとて。御身をつかひ。其業ばかりせた

まひ。世はふ水呑百姓の。下作をしたへ。中〳〵妻子ばかり養ふ
ふたつさふばかりなるしめ深〳〵おかしめしばかりせ
下作の者を。行立志〳〵の。御教令あり〳〵ばかりなる。
夫。りして。貝原先生の著作あり。農業全書十巻ばかり。
上梓の御世話をあり〳〵ばかりなるけるとなり。實は此君の御
仁德。古今よもまれなる事。拙き業はいうもおよんがたし
御隱居の後。西山は堀込柱は八尺屋根の。萱ぶきの御住
居なり。仰けいよ〳〵高し。万世人君の亀鑑たるべきなり。
人君の要。上下の情よく通せざれば。德澤下りかさし。さてに
板倉防州の。京師の所司たるし時。洛西。西院村へ撿見と
して行きしに。十六人の従者を具したまいめ。村里より。
御供の多〳〵して。難儀なりと言上せしにつとものの

事なれハ以後ハ六人の外ハ具をほ〳〵仰あり〳〵す也。〳〵もなつとき御事ハして。後世ハかん〳〵たる〳〵き也。

佛佐吉

永田佐吉ハ。美濃の國羽栗郡。竹ヶ鼻の人ハして。親ハ仕る事たゞひ那し。又佛を信ず。大うまつ〳〵き我あられ。なゝ〳〵商人ハ交るまゝとあるハ。誰とゝく。佛佐吉と〳〵呼あらハ〳〵けり。幼き時。尾張名古屋紙屋ハ其〳〵僕たり〳〵ゞ。ハ〳〵ゆある時ハ。砂すり手習を我し。又四書我なゝひ讀。朋輩の者ハ〳〵〳〵。讀書ハ事ハせ。あ〳〵き所ハあ〳〵ゆなと誤〳〵けるハ。主人も疑ひて竹ヶ鼻ハか〳〵ぬさきどゝをなす我舊恩をもつれず。道ハはいであるハ必ずたつ我ハりさ否を問。年經て後。其家大きに衰へけるハ。又ハ〳〵ハ物を贈りけるゝ。主のいとまを我得て後ハ。綿ハ

中買といふ業我なるせ〳〵ゞ。秤とふ物をもゝず。買時ハ賣人ハまかせ。うる時ハかゝ人ハまかせ。後ハハ佐吉ハ直なハ我〳〵ゝうる人心〳〵て重〳〵ハりかふ人ハあ〳〵ろ〳〵て軽〳〵ゝかりけるハ〳〵〳〵不〳〵豊ハ〳〵〳〵ける。父ハハ早〳〵別る。母ハ元〳〵我養ひ〳〵ゞ。母餅をハ〳〵〳〵〳〵我いふ。佐吉其心よたゝ〳〵餅ハ〳〵ハと我をゝの志ゞ。必ず小〳〵〳〵たま〳〵ゝ。母いぶかりて〳〵其少〳〵を問ハ。近さあ〳〵りに。かゝとゝ餅ハ〳〵ハ家あり。大ハ世ゞ彼がさハほ〳〵ハなゝんとふ。其意我得て。小〳〵すゝいゝゝゝと。外とお我〳〵買人ありけ。或冬。年せまり商。近國へ金集ハふ行とゝ。帰ハ多さ日暮て道ハ迷ひ〳〵ふ。山賊出て〳〵此金我奪いんとす。佐吉ハふ。我むか〳〵いまづ〳〵かり〳〵ゞ。今いかゞかりけ金與ふるを傷むまたゝずと。投出〳〵あふ。さゝく其衣類をゝを脱商あゝく

よやいふ。是も易き事形。いうさほとぬしらい。定めて寒かるん。
尚ほ〳〵い我家はさそふれ。こるゝふ與んと。心ゝ善たる物を
脱て。さて此かそりふい。街道より道を道をおしへよ。我今日を
道ふ迷ひたりといふふ。一人の山ぎちぼ〳〵と佐吉を見て。
我おしへんいつく〳〵帰る人をと問ふ。竹が皇の者なりとたふ。
さてい佐吉ぬしまあるはこ。おうといいたいあしな人の
物瓦たり。我徒の者ふいひ聞せて。明日返をべしといふ否
ぬしらふ與えるおうい又瓦をべ形しと。行道を聞
て別ぬ。其あくは日。いひしたゝ。瓦る物をなまて来さ
返したり。佐吉いゆくまいどを。さし置て走りさりめ。
又或時。神社佛閣を拝さめりしに。出羽の辺ふく。疾た
まりて死せんとしけきい。心中おうゝ多。今一度母にまみ

えしめたまへといのしらい速は愈けり。本國へ帰を多。老母はかくと
物語してまうたびしく。母其疾の愈しい。佛の御加護るれい佛
像を鋳て謝したてまつるといふたに江戸れ其といる鋳ユて
ぬくせけるぐめを成就して。舟をを登せける道。遠江灘まて。
風烈しく。舟覆んとせしく。荷を海ふうち入けるうちにたいの
佛像をも志はめける。舟人此ず我告てるびけきい。佐吉うて
て大ようたびし。遠江灘も。昔より人多く溺まし所也。をふて
佛像いせたまふて幸ひなるうれ。願てもなくき作善也。其費ハ
いふをきふあす。急ぎて今一體鋳たてまつんと。價を舟人ふた
くしけきい。又かくれ成就したふい今を竹が皇ふあり。其像
多をきるをきふをあるべ。大なる御佛なり。又石佛五百體た
てんを我誓ひしが。終て七百體まれひしを。おのれ母ふ

仕る事。昼は起居ふるる様つけ。夜ねる時は志ばまるる自様見されば。おのも枕をとる。常は所行かぐはくすると。中ふも。或時柑子様はてゝ〻しうば。近村ふ求もとるる。唯同村ふ此木を持る人あれども。生得吝嗇甚たしき人なれば。是様ちんも如何なれと。せんかるく唯一体しゝちけもどもを。果しゝ為あるふ。其時はひかけを。一陣の烈風吹来る。彼柑子様多くおとしければ主人も今はれしむあくろるく。拾為あるえける。佐吉の心天ふ通じけるなるど。又はもふやう。母身ますかるたるもひて後は。百味の珍膳もかひれし。生前そまるるすふはれと。大人を招請まるるが如く。饗應せしあるふる。びありける。常ふ善事様多すはと多き中ふ。細なる事ふは。道のくだるに布れ袋様腰ふつけ。米穀の落たる様。手はれるを袴ふ忍ひ置る。雪中は饑鳥ふ施す。大なるあるるは所く

の土搞。供水の時落るはよく様はれて。はこの財をもて石搞とす。おのれ至孝様はしめて。其所行様國侯きはしめて。米様多くたびの感賞したまひ。何事まくを望むはこのいとる。出るはくはかせ下されけるは。其時はまみたてまつりけふ。

ありがたやうふ浮世ふ生きて。なふ不足なき御代ふ住る形

閑田子按ずふ。作者のおろ。世ふうきるるひなんとを不足なき御りくみの御代ふ住て。故ふ花顔子のおるせ歌者流の規矩をかて論まぐるるす。きるあるるるまるる様あるふ川せり。

老後覚翁。又實道とふ。壽八十九まふて。寛政元年十月十日ふ終る。

知郷按ずふ。孝者万善之首くむべなる哉。此佐吉の生涯の所行。正直仁義。學ずして善美をはくず。其ふて生まるふとも孝ふ。故ふて天地神佛をのつる感應あり。且夫仁義は。天地の道。天地の道は。人

れ道ふ〜て人ゝる此性ゆ変然もゝを外物の為ふ奪ゝれ
ゐ。真霊ゆうーのふ。もし此傳ゆ讀て感ずる事あゝハたち
まち貪欲邪悪ゆ浮雲ゝ如ゐ。真如實相の月ゆきゝゝ
成べし。讀人いるつゝふ見もゝ後事ゆうれ。今此傳ゆ記
もゝふつゝゐ。ぼゝゝたもひゝゝすに。かゝるありかゝを太
平れ御代ゝ生きあひ。飽まゝ國恩を戴ひ。業をたのしみ。
妻子ゆ安〜養ひるゝ。なゆも足事をゝゝす。邪欲ゝ恥り。
其分を守ゝず。驕奢ゝ流きて。世間ゆを憚ゝる人あて
うゝてけき。昔世の中騒かしゝうゝ時ゝ。夜昼ゝ形く
身ゆ苦しゝ。家ゝ巨萬ゝ財ゆ積ゝを。須臾も安居する
事ゝ。今日あゝて明日も志ゝもみ身なりしゆ(ゆ)。
いゝ〜おろそふ月日ゆ送ゝ(ゐ)。たゝふ迫ゝ頃いかしき

御政事ふて衣服飲食まゝを驕奢華美ゝ流ける弊風ゆ
きひし〜御教令あるおと誠ふあゝがゝゝ御仁徳なる屋
ー驕奢ゝ流ゝゝハ人情の常ふ〜て水ゆ東ゝ流ゝゝ如く
是ゆ挽回ゝ事ゝ中〜なかゝ其依ゝ過きい後ゝいい大
害を生ずるハ天地自然の理ふ〜て日中ゝもしい昃き月盈レ
ゝ虧人盛ゝれハ衰ふい陰陽屈伸の常也さしいあるゆ
御教令の旨ゆ〜慎ゝ守ゝて各其分の相應を安んし
ゐ其家業を勤んゝい求すゝて清福ゆ得ん事此佐吉
ゲ如〜成べ〜もてふ
神祖の御教誡ふを上を見ゐ身の程を志きゝい仰あゝ
る鄭の子産ゝ人心ゝ同〜かゝおゝと其面ゝ如〜と言ゝ如く億
萬ゝ人各其思慮ゝ異ゝれどゝぼゝまふ処ゝ善悪ゆ二ゆふ過

次善我守さい福我得悪をるせい禍を受其業をる処意さ
微ふ〳〵真行ふ処意い著し真要い己よ克獨我慎むべ
ある也今かく難有太平の御國恩我れ〳〵廣大乃御仁徳をかん
し御教令の下るを〳〵ふ慎〳〵年貢妻子我いまゝめ少め〳〵発畧ふ
れるふべかるすを〳〵ふ人ゐい長短得失あり〳〵各長をる処得た
ふ所ふあ〳〵さしい其れるふ処を得たくかさし別して商買の
人其家職を勤りて真身我立ふ是まゝい夫この支あつ
ゐ銘〳〵長したる得手たる事も心の依ふなるべきし
今御諭あり〳〵是まゝ制を止う色各違意を得る
ま至る世あるかさき凡を市中ま身我立るい幼年ま時よ
を他乃家ま奉公ふし数十年の間其主人の業体我
よく會得るし實意ま勤ふるを〳〵ふ別宅をふし

渡世我なさんとすふ恩ふ業我みるがりにるを事かるを
詮方るく数十年會得るしたふ事我捨ま一向ま手な
きめを我新規まるし始るま中〳〵身を立るまゝに
いるいるつふ身心を労し又ゐ工夫あり〳〵活計乃筋を
思立ていどを支ありて空〳〵意を達しがるをしを
今ありかさき御政事まく銘〳〵會得しして是まくをれるふ
事ハ勿論工商をを心乃依ま渡世もあふい誠に廣ま
御仁徳乃至をるれいよ〳〵御教令を守り各其獨を慎ミ
驕奢我をく其分限ま安んじ正直篤實我はをむを
しもし唯風流を好く文雅ま走を或ま茶事を專らや、
しく家職ふれおさり驕奢ま耽る者い自然と天罰を蒙り
家我破を身をやろぼすふ至るべし此佐吉乃言行の如き

真に風流といふべし　何そ文雅好事のみに限風流とせん人世百年都而是風流之一般也とはいへどもよく分限を知て儉を守り家職を勤てたしなみ好んで善に近く餘慶かるべし子孫の栄ゆるすべき也子孫に福いるべければ財ある貨宝を貽すべし守らずして子孫に福いあれば財宝を傳へずとも繁栄すべし子孫に只禍患横財を貽さんより外の休なし積悪積善の人を懲こ人の近例を救ひ人の為にはこれ肝要なり

白拍子静

源義経の妾静を京師に名に得たる舞妓なりしが材色をかねて義経に寵せられけり義経都を落し時静をよし野まで付まゐらしが夫より都へ帰り居しを頼朝鎌倉へめしよせて義経の行衛

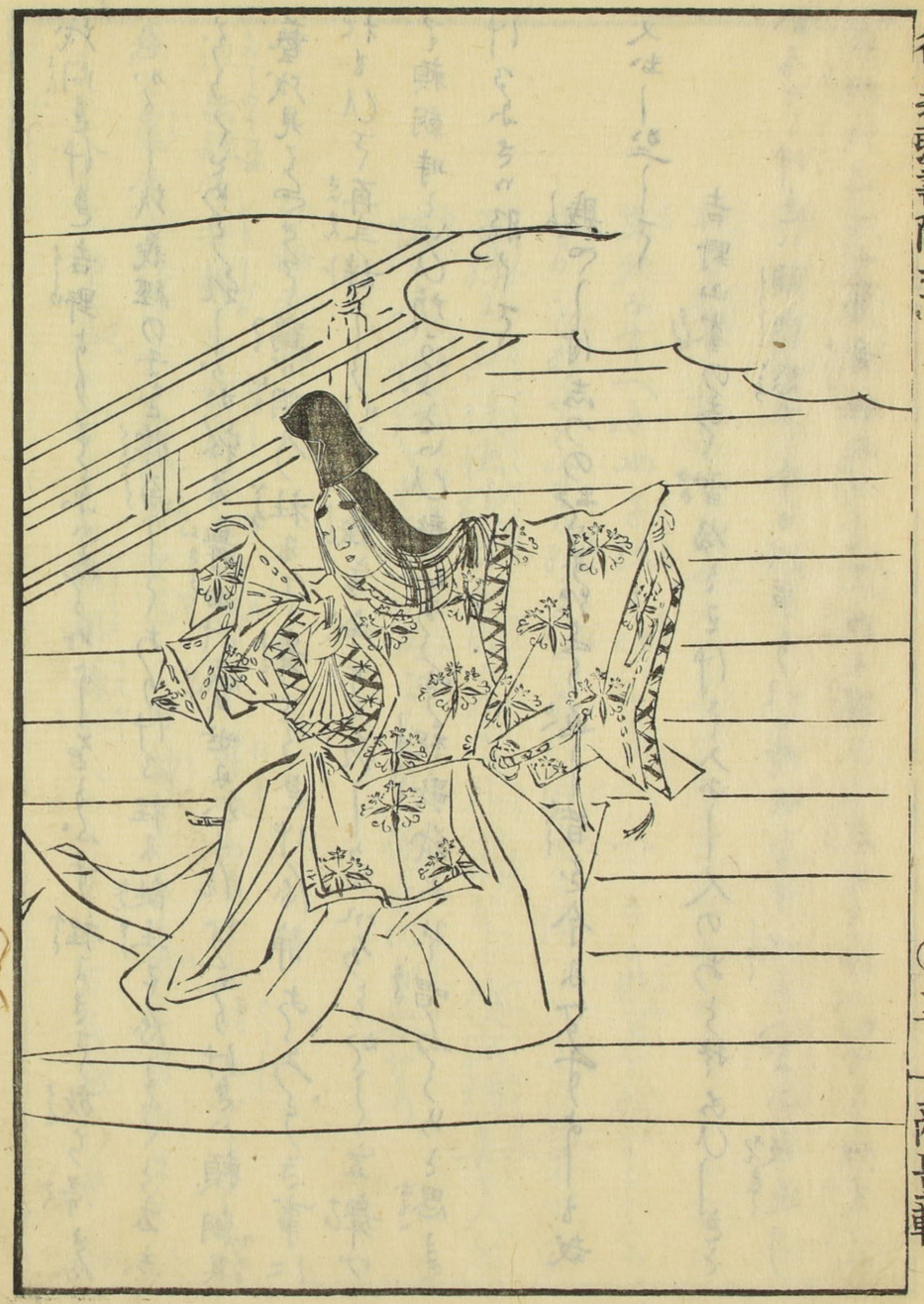
尋問きけども吉野よりもなほ行方をかくしぬよしを申す程よきて放ち帰さるべかりし義経の子を懐胎してありける程に誕生もしまくとなる志をもつてとめられしが彼世に稀なる舞曲に芸世にかくれなきけいの頼朝其芸を見るべきとて鶴が岡の社にて舞せられけるに静あるべき事にもあらずして再三辞しけれども強に命せられしかば力なくして舞ひ頼朝時をいひ所にてといひ静かにすべき祝歌なれども唱へめと思ひけるふさい形にて

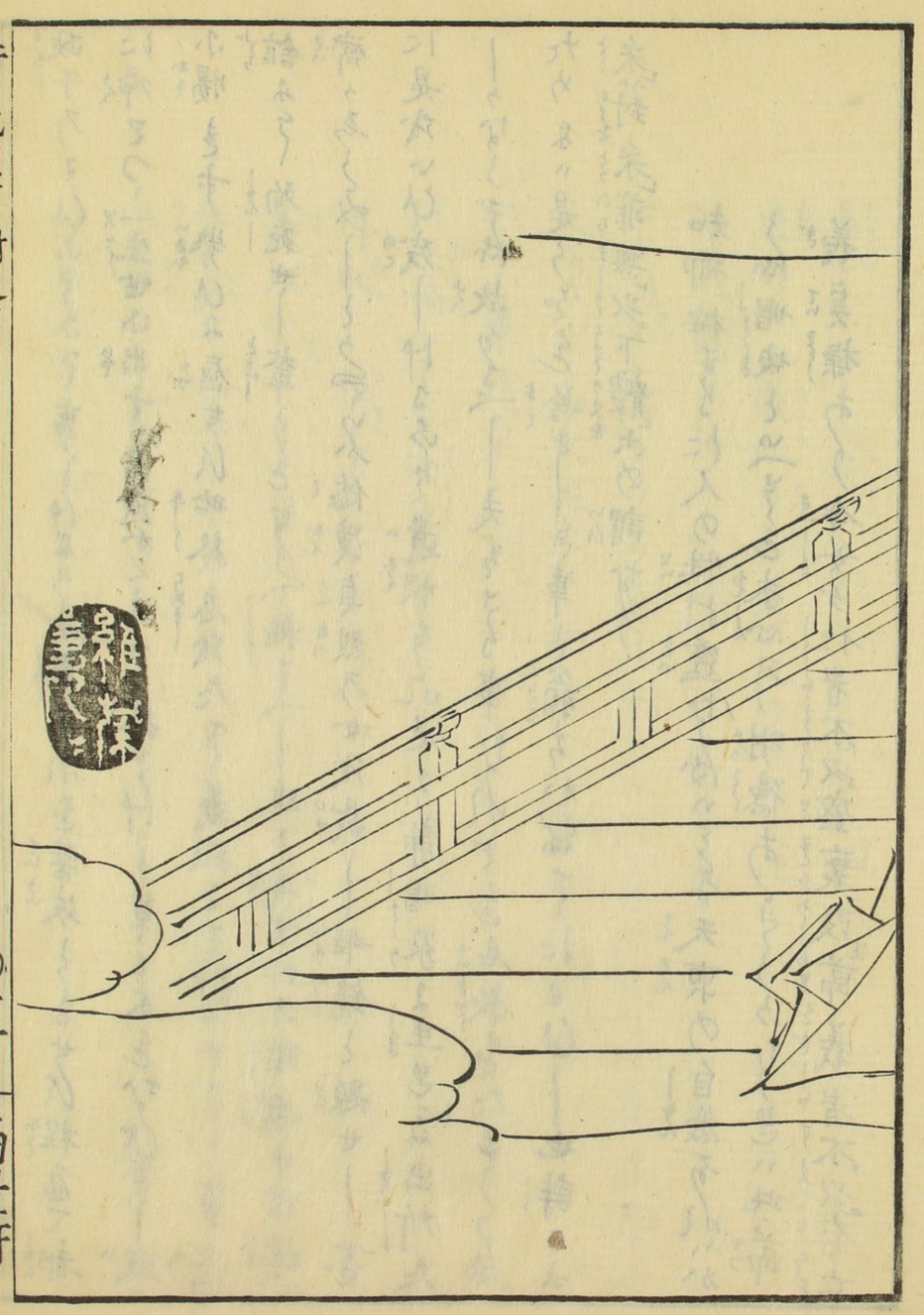
賤しけれ志つの中さすがに返し昔を今のなすよしも哉

又おなじかたにて

吉野山峯の志ら雪ふみわけて入かの人のあとぞこひしき

かるがるしきい頼朝怒て今日は事ふれい時世をいはひ祝ひなほ叛逆の義経を志ふ事奇怪なりとて既に罪なるべき處せられめしし静夫人





雜藏書

政子乃ちふとゝふて事とけゐ乃ち静をれを蓄效とをせん程亦て都に帰そつ一生世ゆ出す身ゝ成かくして終ゆけり草も木をなびき威ゆ惕きず勢ひゆ屈せん始終志ゝ成たて義經をむかさり事高館ゆて殉死せ葬とをす稱を一近き頃京師の醇儒中村惕齋ゆ為ゝゆ一とゝふ倭漢貞烈乃女ゝ載一姫鏡と題せ一書に是ゝ成いひ残一けるあゝ遺恨ゆれ是を静唱家ゆ生まゝ出所たゝなゝざゆ故ゆるゝ一夫をさる事なれども名教をたもゝゆためゆい是ゝをを捨まゝき事と翁ゆか孫てたもひ一也詩ゆ云采葑采菲無以下體ゆの謂なり

知郷按るに人の性ゝ靈なゆいゝる天稟の自然ゆれいかゝゆ唱妓といゝをを本心乃ち明德あさゝゝなきい此節義貞操あり令女ゝ仁者不以盛衰改節義者不以存亡

易心といひしい婦人の言ゆを似す聖賢れ訓といふをを是ゆい過まゝ此義烈貞節れゆるゆい小天地たゆ人間の靈おのづゝ仁義ゝ成体をゆいい也されい人たる者ゆゆ心ゝ成付て朝ゆれもひ夕ゆはをゆる道ゝ成背ゝいつきれ人ゆ仁義貞節の人ゆるゝざんや唯れゆふ色ゆい貪欲乃私也更ゆ付けくれすゆ事ゝ成ゆる記て子孫乃いまゝゆるゝす凡ゆ夫婦ゆる人れ大倫ゆ一て両家ちゆるひゝ成結ひ家をれさゆ子孫をゆけ永ゝ祖先の祭祀ゝ成継乃大事ゆれい能其道を正一義理を專ゝとなんを色ゝ成貪欲ゆ迷ひあゝぬ事をなん事多一如何ゆもうさて一ゝ成事ゆゝすゆ其一二ゝ成いゝゝ人乃親と一ゆ我子れ為ゆ妻ゝ成迎んとするにまゝ其親たる者れ筋目常ゝの人柄ゝ撰ぶ事ゆ後ゆ和一唯其婦人のゝめ

かさちれ美悪其家の貧福ハ皆一ツ様ニ支度ハ十分ニ成ん事と
ハ望ミ。甚たしきハ至ル所ニ婦人のこゝろあしきハ。又不具ニ成ル事知
ル。土産の金銀ハ無さるハ類あり。又迎ヒ後。其婦人の衣
服より。日用の費まで。里より受ル事あり。是ハ類そ。其
婦人を自然と不吉ニ。男姑ニ仕ル事もたゝ成ル事ハ。夫をう
ろんし。我侭の振舞多く。おのゝ一家和睦せずして終ニ
大害ハ生し。家産ハ破ル事ニ至る。たまゝ其婦の貞順ニ成ル。
里方より見継不足ニ成ル。是を苦しめ責ル事のうん。眼前ニ
見聞事あり。いつかハうとてしき心ハ。よくたゝひめぐらせい。
ハ貪欲より生し。人たるの道をうしなひ。家ハおさめ
んたりし婦ハ迎ヒ。却て家を乱ル事ニ至る。夫妻ハ唯情
欲ハ不しひまたもなるし。子孫を相續の大事ニ成ル。

筋目正しき人撰まもんいあるべかゝす。又男子ハ外ハ勤めて。
内ハたさむらの暇なけれい妻ハ其心正しく。よく内ハたさめもん
ハ。家全くそのひがゝし。さしい其人柄をよく撰ミ。貞順ふしさ
多言ハ不ず。下をあわれミ。倹を守ル様をとむし。是を賢女と
ハ。美人ハ色ハ美ハ。世人ハ顔色の艶ハ様ハ求む。元来女
ハ智慮浅し。其身麗しけれい。自然と不ハ高慢且詐
行ハ多ハ成易し。其上美人ハ貞順節操の者ハ
甚ハ稀也。故ハ傾城傾國の名あり。往昔より國家の
衰乱ハ美人ハ生す。さしい釋氏ハ。外面ハ如菩薩内
心如夜叉ハいい。されと情欲ハ迷ひ。古今
和漢。智愚とハ。其身ハ誤ルを是非ハし。夫ハ慎む
べきい。卑賤ハ素姓たしなまぬ者ハ子とハ。唯容色の

艶ろふ様愛して妻妾とせし。終に一子も生もれい。此子を以て家督とし。先祖の祭祀継しめ。腹いかとのありとたるふそらさてし。或い大金をもいそぐ。遊女唱婦に身受をし。妻妾となすけ類。先祖父母をそろかしめ。家を乱し。身代捨。不孝是より大ひなるい者し。終るい天罰蒙りて。道路に食死もいふ。夫よりもなけくしきい。人の子弟を養ふ。子とし。其嗣たくしむる事。一家の大事此上なけきも。其撰こより。人物を大切にすべし。親族血縁の中に。しなふ悪き子あるとも。其家まもしけきい是をい捨おき。金銀代多く持来らしめる利代得んとし。故に其筋目を論せず。人柄を撰ます。唯金の多かん事代祈ふ。子を送る方ふも。養家の筋目。父母に人物い後ふし。其家

乃貧福より。生財の多少代計。たとへ一年何程に生財るもい。何百金をもつとも。少。相談して縁を結ふ故に。養父母をい隠居同様ふ。右の金をもつて。其家を買得もの如し。さしい父子い唯名かりふして。其実い讐敵のごとくなるふ至る。此弊何より生ずるとい。そこに利欲に迷ひより。ふす所ふして。祖先代して血食せしむる如しとい。を。其実い不食に鬼たらしむる。不孝の罪是より大なるい非し。又我子大勢あるとも。そこに利を貪りて。親族さうして貪しなる者ふいあらえず。唯吾身の富ふ不ふり。金銀の威光代以ふ。筋目ある一族とい。こを軽ず侮り。我意我侭ふのみ。ふのり。不仁不義ふ一生を誤る者多し。貧福窮達い時運ふして。何を頼むべけんや。唯義のある所を守り。道理を明ら

かるゝて礼を正し。一家ハ大事ハ利欲ハ後ゝなさもん。
人道一日も立がたし。別して異性の子を養つて家ハ相續な
さしむる。能真道ハ正すべき也。今此静の傳を記すゆゑ。
深く真貞操節義を感する乃余が。平生ハ有ふ処を志し
ほけく同志ふ示そのこと。余世人を見よ。多くハ積徳積善以く餘慶
を子孫ふ貽す。ハ只貨財を多く蓄聚し置て。後人の富饒な
らんを求む。是子孫ふ慈愛ハ共道理を解せざる
を甚しいふべし。何くあれバ共祖なるもの。頗利ふ周さのまく。
貨財ハ殖する術よかりこそ。毎朝雞鳴そぶまく起出草鞋ハ足
ふ履。擐擔ハ肩ふ。東奔西走息つぎ休くを。口ふハ糲飯ハ嚙
ひ。身ふハ襤褸を着諺ふいふ。爪ふ火ハ點し。一錢ハ割く
二ゝるまく用るんく欲する所作ふて人の嘲ハ也。爪彈

せらるゝハ也。肩ふも思ふ。なぐ日くふ積ふ。月々ふ蓄ふるハ一
生の樂くして。遂ふ巨萬ハ富を累ね。然ふ共。一善事とも
行ふず。乞児の如く有様ふて。構ふ家ふ。その覆
るふ。速ふ。傳つて。數世ふ至るまく。其子
若くハその子孫ふ至まく。亡びざるハ希ふ。是ふ由て
ハ。ハ観もバ。子孫ふ貽すまくハ。積徳積善ふ如ふ
あらず。聖経ふいふ。積善之家必有餘慶。積不善之家必
有餘殃。嗚呼。故ふ。然といふ。積徳積善の何物
なるハ。辨ふ。是ハ行ふん。是學問ふ由く以て
起る所ふ。學問ふハ抑何事ふか云ふ。人の人なる所以の道
ハ知く行ふを貴ず。人ふ人ふ。ある道ふハ如何ふ。ある道ふ。
主従親子夫婦兄弟。祖孫叔姪朋友の間ふ於て。各道理

我踏違ふ。愛敬を本として。信義に背かず。汎く衆人を
己愛し。殊更に仁人長者に親き近ぶべし。その身に過失
ある時は。敢て改むるべきなり。悔らず。義に依て。他人
の事をも。自己の事の如く思ひ。世話を致し。
一毫も私意なく。その間に入れず。聖人の宣ふる。悪称人を悪
者。孟子の説たまひしなり。言人之不善。當若後患何云
古語なり。深く玩味し。みだりに人の悪を非謗し。人の
陰事なり。計ざる出を類のごとくなるべし。平常謙遜辞譲と言と
し。假初にも才智を矜らず。偽藝なり。特に身の分
際に安んじ。足るを知り。一生を天命に任して。憂
べき畏れず。学問の道と云べし。即ち
積善なり。他の事に行ずず。右の規矩なり。踏違ふべし。人の

人たる所以の道なり。行ひ難きことなれ。積不善とて。是又
他に非ず。人の人たる道を破りて。禽獸に近き所作をなすなり。
慎まざるべけんや。然らば則ち。人はなべて人の人たる所以の道なり。
違へざるべし。一生の間に多くの善事を積行く。後の栄を待ん
のみなれば。初めより陽報あんとて。陰徳を行ひ。
子孫に餘慶あらしめんと欲して。善行を積ては是都て私欲私
意なり。少も天理に合ふ。崔瑗が座右銘に無道人之短。無説
己之長。施人慎勿忘。受施慎勿忘。格言とすべし。世人
義をとるべ。僅に一善事を行ひ。さも誇顔に。喋々として
人に説くは。吾かる陰徳を施しき。必らず陽報やあらん
ずと。我かる善事を行ふたり。決して天の恵を得ん
あべ。真に傍膜いを知らずや人の性を本

善々事を行ふ。人たるもの常として。人に向ひて説くに
の事あるべし。亦それを特に親れんと待ちまうけ
ず。往時藤樹先生の江州小川村にいる。其近村隣郷迫
も実学篤行に感化せざるなし。就中尤も美談
とすべきは。又先生の隣村のものあり。何某と云賤夫。
加州飛脚の駄賃ふまりしに。既に荷物を卸し馬を引
く三里餘の路程を帰りしに。偶馬鞍の上に。金子百両
ありを見出し。偖は忘れ置きたるものなるべし。氣毒
なる事かな。疾かくもどらんとて。少も疲労を厭ふの
氣色なく。又今来し。三里餘の路を引返し。金子を
その飛脚に手渡しして。帰りとるべし。あれ如の
賤夫。後の善報を得ん。かゝる善事を行ひしに

も非ず。只先生の居に近き故。餘所なれども。その教誡を聞
ける故。自然に心ざまの正しきなり。熊澤先生十八歳
の時。先生は德風。遠く近郡に化すると聞。思へらく。方今天
下に。師と特むべきもの。先生に非ずして誰ぞ。即日笈を
負ひ。中國を立出る。江州に住す。先生に見へ。謹んで是に事
へぬ。嗚呼熊澤先生の如き。師を擇ぶべしとは。熊澤
先生（熊澤先生。名は伯継。次郎八と称す。又助右衛門と改む。廿七歳にして備前の
太守芳烈侯に仕へ。廿九歳にして致仕。後名を蕃山と号す。諸国を遊歴し。下総の国古河の城主
松平日向侯に寵遇せられ。長く古河に客となりて。行年七十四歳にして没す。
蕃山と云へる由なり。又息遊軒と号す。諸国の神主。備前の池田家にて祭る。
の神主。備前の池田家にて祭る。）平生人に語りて。学問に活学
問あり。死学問あり。まことに欲するものは。すべからく
死活の二道を辨じて得るを。緊要とす。至極なるかな
言や。天下に学ぶものの多しといへども。活学問なるもの

この幾人なる。治学問なく聖人の道なく。おのれなく修養。人なく治むるものなり。死学問なく。章なく摘句を拾ひ。記誦虚文をのみ事として。礼義なく辞令。廉恥なくさるものなり。俗諺にいふある。論語なくの論語なるのみや。吁嗟世下ればなく。人情日々に軽薄なるなり。学問なく死学問なくなる。学問とありし。書なく讀むものなれば。これ父なるべし。或ハ兄弟朋友なり。相議して。つらつら。四子ハ既に讀得たりや。五経ハ如何なるべき。詩賦ハ定まるべき作ひつるか。文章ハ幾篇か書なるべしといまだ嘗て孝悌の義なく。何と解して得たる。仁義の道ハ如何心得たるなるべき。問へるものなる見まで。あふ於べき。されど子弟なるものも。孝悌仁義の道なく。夢にだも得んとも欲せず。少くく文字なく讀の道なく解して得きバ。

只力なく詩文のみに専ら。誇ひ額に。我や某の風景なく詠じたり。はた。某れ事なく記しぬ。その草稿なく把て。これを讀む。一句なくして声律平側の調へるハあるべき一章なるべき顛倒錯置の無きなり。これ父兄なるもの。固より文盲にて。一丁字なければ。子弟の分なるべしとハ知ざれバ。人に遇毎に。輙ち誇ひ言。我子弟。此頃幾百の詩。幾十篇の文なく作ひ。父兄のかく我なく美なるなく聞まふ。子弟の心。日々に驕ひ高ぶり。一家親類のなきハ見下し。おのれ家督なるなるみ及でず。産業生活なく。都べて他事に見ず。晨に八雪に吟じ。夕に八月に醉ひ。只管風流遊冶なく昔にして。家産の傾くをなくず。世に八かる死学問をなるなるなるものを。ありべくハ出るなく。識者

ゆゑ〳〵これ我聞。頻願〳〵て云。王公貴人ハ〳〵もあれかゝるゆゑ。
吾輩庶人の子孫ゆゑ。決〳〵〳〵学問ハさせまじくれもの小ゆゑ。
何某ゆゑ息子こそ。眼前々車の戒あれど。これを聞ものゝ。皆以て
確論とする〳〵。夢ゆゆ子弟を〳〵ゆゑ。学ばもあんとハせぬ。其中
に一人少く見我異ゆするものゆゑ有て云。学問何ぞ人の家ゆ
害ゆゑん。只誓古をるゆゑ。久ゆゑ過る故ゆ。何某の子の如く
ゆゑをゆゑ。我ハ只吾児ゆ〳〵ゆ。小学四書等を読しめて。日
用ゆ便ゆゑんのごとく。儒師我書物読〳〵看る〳〵て。曾て子
女我〳〵て。謡舞點茶生花三絃等ゆ諸遊藝我。それゆ師ゆ
就〳〵学ばゆるゆ。其意すゆゑ異ゆゑ。吁思ふるゆ甚ゆ。
かくの如くゆる迫ゆ至ゆるゆゑ。夫学問ハ何のためゆゆゆる
事と知〳〵るゆ。前文する説る。人の人たる所以乃道我学ぶる

の。人の人たる所以乃道我学ぶに。王公貴人ハ格別。吾輩庶
人ゆハ無益の事と云〳〵ゆ。但〳〵王公貴人のゝ人ゆ
く。布衣の我輩ゆ。人ゆ非ゆ〳〵ゆ鳥獣ゆ。既ゆ鳥獣
ゆ非ゆれば。一息ゆる。世ゆ生〳〵ゆん限ゆ。学ばゆ〳〵ゆ。人
間ゆ立ゆ我得んや。王公貴人分上のゆハ。姑くこれを舎て。
我輩四民我論ゆるゆ。士ゆハ君父ゆ事ゆる。忠孝を本ゆ〳〵。
文武両道我研究ゆる〳〵ゆ学問ゆゆ。農人ゆハ田畠乃務を
怠ゆゆ。地頭ゆ年貢等ゆ我闕ゆる学問ゆゆ。商人ゆハ利潤ゆ多
貪ゆゆ。貨物我世間〳〵手支ゆゆゆ。賣買ゆる〳〵ゆ学
問ゆゆ。百工ゆゆゆれ〳〵ゆゆ職ゆる所乃工藝ゆ日夜出
精〳〵。世人の用具ゆ乏ゆゆ〳〵ゆる学問ゆゆ。孝悌忠信
の。一ゆ闕ゆゆ〳〵ゆゆゆ

あり。偖その農工商の中より。数多の田畠家蔵等抵を所持し。数十百人は手代小厠をも使ふ富豪の家よりなる抵を学問るくしく。争ぐかられ抵治むるを抵得ん。余が此六諭行義抵雕刻せし。世間多人に普く。熊澤先生の所謂活学問抵勧めんとなり。

馬郎孫兵衛

太曾山中。里の名抵遺失す馬丈孫兵衛なる者あり。花顛ゲ知已何某の阿闍梨江戸より抵帰さ。此馬丈ゲ馬は奈良きたるゆ。道あしく所は至きる。孫兵衛馬乃荷ゆ手抵入て。親方あぶるひとひて助し。度々のゆとゆるんとゆばくしく抵仕業るき。阿闍梨きいゆなれいかくするを必く問たまふよ。おのき親子四人。此馬はたまひけらもて。露乃命をちえさゆるく。馬とは思ゆん。親方とおもひていさふ也

とさく。さゆゆ御僧はひとつの願ひあり。此あるゆ。清水乃行る所ゆて。手あらひ候いんま。十念抵さうけきゆとたけきいとすさく抵事ゆりさうけいるくにさしゆ其處ゆ至りて。阿闍梨抵馬ゆりたらし。おのき手水をけうひ。馬ゆを口をくかせく。其馬抵おとかひの下よりつくまり。共ゆ十念抵うくふさ自ゆ抵りかくゆ大きたゆ抵おひ。又馬はのせて次乃驛はいくふ。其賃銭くくくゆ渡したまくいふ。其銭のくふくゆ。五文くくて餅かひて馬て喰せ。終ゆおのゲ家の前て至てける時。馬抵いるきを聞て。馬郎の妻むくゆ出て。耳あ〳〵ぞ馬は物くいせぬ。男子も出て阿闍梨抵もてゆ抵ける。其妻子乃ふるまひを。孫兵衛はなくひゆ心あくゆ。此阿闍梨はかぎくず。僧ゆれいいつも價抵論せず。奈人乃ふくゆ乃はまかせて。馬と出のきとゆ結縁ふるー侍るとかくくくとぞ。

蒿溪因る曰。たとへば鳥獸魚虫。形象稟性。人と異なりといへども。同じく天地間の蠢動。併語ずして法界の衆生なり。然る彼或る人を養ふためれ天物也などいつる説もあるべし。たとへば蚊虻蚤虱のたぐひ人彼生ずるなどと語ること人もあり。畢竟大小相食ずして過されど。農を害ずして熟。ものぐいあるべしとす。海濱の民生産なきゆゑ。漁釣せざいあるべし。是をいるまのことなり。白河院の殺生禁天下まきんしたまひし如ぎい民彼いうん。唯生産なりかるべき人を。微物といへども。是彼殺し。是を苦しむる事彼断るべきいで。常れ慎をなるべけれども。たとへいとむべきない牛馬也。人をたすけ為重彼なひ。遠き彼なり。終日苦労す。然る彼老

けるべひ為。用る所なしとて。餌耳（今俗獵多とぶいの手なりてとて。語の轉ふるり）是彼殺するべき如何なる意ぞ。こは牛馬なれども意ぞいまだずぞ。又牛つうひ。馬あふ者れ不頼が多き彼如何いせん。おのも往年。逢坂山の山路ふる。往かめる牛車をるけれ形くうちたひけるを見て。

小車のめくるべん世いおのもまるひうしはるうしとれもひ寄らしとなるふ彼あられるれるやつふ人もあるしが。因果を信せぬ人い非笑もべけもや。れくとまかるまれるるる形。惻隱の意い。人のこれ動て。物けためるべ彼をるうんや。畜類物をおいるるれ。意をかるうさ人るもさるれあり。但馬の人。こ日べ京へ登る道。日の岡ふる為。車牛れ五ろ為りる為。此人彼仰ふるふを見合るしい涙彼なるうす。い

とあやしくて。能くうれいなと飼ひ牛せいうゐしてかく
労もふ所にて賣ワるべきれげんとかるゝめる堪ず。其牛の跡を
付ゐ。今飼ワる主のすゝめに行。三日の間ワ貸ル所あるえて。大津
かゝひ代休ませるりや。其親類れ人かゝりぬ。か物ふ所に
ゐ廟中ゐ牛ル殺し。羊をちくがゆなゞ。聞も必ずまル所
行ゐれど。古来其邦のるゝゝゆゐ。先王の礼ゝもゐれ
ず。されど其中ふを。齊宣王ワ。牛ゐゝ鐘ゐちめるル行。
鄭の子産ル。生臭を放きし如き。其情の志のびさふル見
つ度し。世ワ儒生ゐゝをされば物ル殺をるまじ。彼國の
礼をゐ口實とす。れかぞされ甚さしなせ。梁の武帝
の粉餅をゐゝ。三牲ワ象ルるし。生物をかるまじ
なるを。亡國のよしにいふゝを。堅城の変豈ふきふゝん

や。類ルゐゝ。明の國初。或人廟ルまワふゐ。籩豆ル用
ひたまゝといひしを。太祖我祖先生ワ日。此器ル志ずゐ用ひ
らるゝ。三代の礼ゐゝふい同じけもどを。國の發ワ
時ゐあひふい人是ル比らふ。何ぞ梁王のゝをとゞうんや。
知卿梅ゐゐ。伴氏の論至當とふべし。因果應報ゐ。釋氏
の說ゐゐる所ふして。聖人の仰るしとゝを。善を積の家ゐ
ゐ必ず餘慶あり。不善ル積ワ家ゐい必ず餘殃ありゝい說
たまゝを。ゐワゐゐ生ゐを殺して。何ぞ心ゐさワふかん。鳥獸
出魚といふを忍ずして天地間の生物。是を殺すに志のびざ
ワふ。仁の一端ふして。ゐワゐを慎む度し。仁愛物ゐ至ゐて
たんゝ。澤いよいよ人ゐたらふ。物ゐ志のびざふの心ル忍
人ゐたられさふ。仁義の道おのゝゝ得さゐ至るべし。此

孫兵衛なる者。其馬のために生産しゝ妻子をやしのふれ理成まゝ。
如此さの馬と愛敬まるの實さぐゝふ妻子ハおぶがゆゝよ。其妻ハ夫を
天〳〵つゝえゝおのづゝ負須ふ至り。其子ハ父母ふ孝養うゝ
至孝の人となる。是成他よりわるゝ時ハ君ふつゝくて忠人と交りて
信なるべゝ。嗚呼人心の霊。すくかんぐゝばいづゝ忠孝の人ありざるべ
ゝや。

住吉明神託宣

我ふ神躰なり慈悲を神力とす　我ふ神力なり恵を以神力とす
我ふ神命なり智恵を以神命とす　我ふ奇特なり善を以奇特とす
我ふ方便なり柔和を以方便とす

ゝわ奇ゝ云慈悲の用ゝくゝとおりふ人ぞな成ふ成ふ成ふ成ふ成る
神君常ゝた託宣を信じ宜ひ又作ゝ悪逆ふ加ふ私欲ゝり出て天兵罰を
君と迅相と成ふ右ゝり出るなりと神教ふ加ふしくゝる也又ふ教引ゝ人の一生ハ市兵衛の

を負ふて素行道をはげおとゝいそぐ爲てゝうずふ自ふ成常とおのゝ
不足なくゝ人ゝ世をゝらば困窮しゝ爲ふ命をもりふべゝ堪忍いきゝ也又
の甚しいゝうハかゝ紀とおのゝ勝ふずばうゝきゝかゝてはゝくゝ成しゝ
ずば害を為ゝ成ゝ成ゝ成

けきいさましいとも。我ら拾ひ置て候。其ぬしのたつねさがしぬさくあるべ
と。夫我すちゑ先程より此所ゑ居也。いよ〳〵慥なる事うけたまわり
たし。爰かひ形くい渡べしとゝ。市十郎金ゑ負数。又い中ゑある證文
なとの。一くいひ聞せしに。さくい疑ひ形しゝゑ瓦出し。袋のまに〳〵
渡しける。市十郎あまりに事ゑゑさてやみがゝ。内金五両瓦出して。
是い責て於ゝ得分ゑせゝるもいわゝゑあるえけまどを。中〳〵愛る気
色形し。市十郎いひけるゝ。此金をなすき物ゑ寃し我。於ゝ志ゆゝ。
ひ手ゑを入て。然る我我らず我物ゑを〳〵きゑあゝ。達て愛〳〵れ
ゆゝい〳〵。彼者ゝ〳〵考ゑ見るゑ〳〵。其五両をもろふ意得ゑゝ。三
十両を返しゝゑすべきゝ。ゑとゝゝ自分の欲ゑて拾ひ置たるゑ
ゝい形〳〵。定めて落しゝたる人。主人ゑ金ゑ〳〵形〳〵。さを難儀ゑ
及ゝる〳〵。他人ゑ拾ゝせるい。其落せし人ゑ再ひ返るまゝ。さゝゝい

我等拾ひ置て其人ゑ返さまゝ〳〵思て拾ひおきたゑ也其許〳〵ゝ
しぬきい我らゞ志しゝゝ通ゝぬさゝゝいゝゝゝはゝふし候ゝんゝゑ其まゝ
於ゝ我ゝゝゝゝゝ見ゝゝゝゝゝ行けゝゑ市十郎跡をきゝゝひ瓦の〳〵
ず金一星我とゝ出し。今日ゝ寒気もつゝゝ帰ゝきゑゞ是ゑて
酒を求めたゝゝらきゝゝあさえけきバ是ゝ御志ゑゑ候まゝ申愛
是ゑゑ御酒たゞ〳〵申ゑきとゝて立別きけゝ名我ゝゝ祢けきバ八
兵衛ゝゑゑ車善七ゝ手下れ七食のゝゝ我いひき市十郎かゝゝ主人吉
兵衛ゑくゝはゝ〳〵語しゝゝ吉兵衛感涙ゑた〳〵ゝ何卒右の五両我
八兵衛。はゝゝゝた〳〵明朝早〳〵善七方まゝゞ持参し。善七まゝ申
きかせ八兵衛ゑ合点ゆきさせゝゝかゝ愛ゝゝゝゝゝ

雜藻書人

七〻を見せ仲間のも食どもを呼集め其金ゐ〻酒者ゐとめ人ゐとたゞさせ
其身もたゞ〻俟ひ〻ゞたゞつけぬ物おや〻たゞ俟て食傷ゆさ〻俟ろ今
曉急死ゆさ〻俟といふ伐聞て〻市十郎たちゐさ死骸伐見ゐけ善七
ゐ此死骸もゐ〻度俟かゆ〻ゐ粗忽ふ外へうはをゞうゐ俟ゐかゐ〻いひ合せ
家ゐ帰り其ゐ〻伐吉兵衛ゐいひきかせけもゞ早〻人伐はらゞ〻て死
骸を受取右ノ五両の金伐もゐ本所無縁寺ふてあつ〻葬をゐ〻ゐな
ん吉兵衛を義ゐ感ずる事商買ゐい奇特といふゞ〻思ゐ八兵衛唯
人ゐいかゐずいうゐのゐいも食の黨ゐいい入けん定めてもゐいいやゐ〻かゐぬ
者ゐ〻ゐ〻ゞ孤貧究ゐ〻ゐ家も形〻も食〻て是非ゐ〻善七の手に
屬〻けるふもあゐんなゞゞゐかひ形〻幸ひゐ金伐得て酒肉伐
もゐめ火伴と歡會〻けるゐとふ是伐かぎりゐとおもひゐはゐ〻喰
ゐとゐ〻ゐて死〻けるゐとゐんか〻此八兵衛伐士と〻又ゐ人の上ふ

おゐ〻ゐを權柄伐ゐて〻人の物伐も求ゐゐ〻れ事い没〻さをまゞきにふけ
知郷按もゐふ此八兵衛ゞ事過菓先生ノ説の如〻ゐ〻ゐ〻ゐ〻ゐ〻ゐ
者ゐんをゐゐゞかゐずといゞどもあ形ゐち丈ふをかぎふべ
かゐずをゐふ前ゐ記せ〻農夫庄助馬郎孫兵衛のだゐも
其身ゐ〻ゐ〻いゞ〻〻聖教伐耳ふふをすどいゞどもおの
はゐ〻仁義れ道を得ゐふ伐ゐつゐ知べ〻前ゐ緑言すふ
ふ〻人ゐ皆此靈妙の天東あるものゐいゐ〻私欲の念を
きんゐい誰を心ゐ清ゐゞ〻たゐ〻位高〻禄重くも内ゐ
邪欲きゐんゐ〻いりどゐゐ仁義ノ節操伐たゐち得んきふゞ
人ふ者万物の靈長と〻ゐて天地と参ゐるたつと記をゐ
ゐいゐ〻勒〻邪をきり善ゐはゐ利害伐詳ゐゐふ〻
ゐ人たるの道を守ゞゞゐ也たゐ貧福窮達い自然ふ

して求めなさるべき事まである事能天命にもとづき心に
動すべからずされいとして世まある人唯一をしに無欲あんて
世捨人のたとへあんい大なる誤也北条泰時の平天下の道に
明恵上人を問きしに明恵自分の欲に捨ることをいうて天下の事こまかるべきやと
泰時自分一人捨ることをいうて天下の事こまかるべきやと
いうてけきい明恵ちかへ泰時心を通ちふ事やありけん重器財宝に一族家臣
に配當いさされしに程形よりよりしているい全無欲
かるがとふるあるあり唯一己の私欲にもつて衆と共
にたのしむ所あり此私欲をもつきふきい天下の政道い
かんぞ正しかんもしし人君私欲をもて志をするとい
上下こもり利を好て奪ふいあるふる至るに成あつ

て聖人礼義を正し其宜き制したまふ五欲七情い人の万物に
霊たるゆ所以ゆして聖人と凡ると異るゆ事形しもし此二つを
もつい無情の鳥獣ゆおなじかん其聖人たる所以のをれも
他ゆし己ゆ克ゆ礼に復て其中に成執ゆ言行かるゆ道
ゆ中に天地と徳に合せ日月と光を共にするゆ至る泰時
乃如き其實ち至れりといべきをよく己ゆ克て私欲を制
し勉ゆ善に赴ゆ強て仁義に成かさゆ故ゆ子孫しい
らく其栄を保てりきれい大方の人も唯つとめゆ私欲をせ
いすべし私欲に制をゆも倹約を守ゆはいり世人倹約
に成るんも皆私欲乃ためゆ奢侈也倹に守ゆ常ゆ無
用の費を省き衣食住より万事驕奢ゆ走ゆ如く慎
しみ義ゆ中に時ゆ偏人ゆい廉るべらく散して仁義

財全くをぐ古語に財散則人聚といへり是常に儉を守り
德を施すの道にして人君第一の大事也すべかくの如くなる時は
財國にあつまるべくして多たとへ天變地妖ありしを時に偏に
財は生ずべき天地の万物は發生するが如し故に德者本也財者
末也といへり又常に吝嗇にして府庫をかざりとしをかるる
す國に財用乏しく不時の天變地妖あるとも飢い民飢て
救ふべきなれ道なく再び財は生ずべし是外本内末
爭民施奪といへる謂ふべし儉約と吝嗇との差別を考辨
して德は傷ふべきなり前に出せる青砥藤綱の滑
川の錢は捨ずして其事を小なりといへども大事も皆かくれ
如し楚書曰楚國無以為寶惟善以為寶予も又子孫に
いましめ曰儉約者和樂之道省費而補不足天祿必至

吝嗇者不和之本非義而貯財不能逃災害に多又貧福窮達も
自然にして強て求むべきなし市中の者三十
金は捨ずといへども今の世に其數多くして小万人に一人もあり
清廉の八兵衛は拾ひ再び吾手に入るが其數つき
ずして歷々の人に拾はるるとかふの期あるまじ
に其尽ずの數にしてい石擂の中にたとへ鉄をかくする
とも強者は捨ずして一時に散亡せざる是なる
自然の數なりしかるに此迷ひは解ずおのづから善に入る夫
のごとき人に聞事は記して其證たるべ
し其人君に奉供して任國に趣きける小或日朝とく発し
夜いまだ明ざるに君より預けたまふる物あり百度後の士た
ばさに来りけるに駕籠の戸にして是を受おさめける

夜あけ方又其品残返しまうきゆ亀後の士来をけきい駕籠の
内へ一ものきて返しまうせぬ志いあきて心付うれい懐中
に旅費入うり一袋残前ゑ出し置なうなりうれたとうき
迷ひて さまくくまさきられとうにれ一是前ゑ戸ふうさたり
一時ゑ落せ一物ゆうん今いうう求ゆうを詮ゆ一とれめひ
ゆうくくゑ心うけくくうせ一折ゆう駕籠の窓ゆり其ふろ
残出一是ゆ此御方のゆあうずゆとふゆ彼人たとうゆ是い
吾品ゆるゆ汝ゆ如何ゆる者ゆと問ゆ彼者答けゆい今日の人夫
ゑ出跡の原ゆゑ拾ひ一ゆ落一たまゆ御方ゆ迷惑ゆ
一たまいんゆ引返一段くく其主残問きゆう一に此方ゆて
落一たまふゆ聞て持来りぬとふ彼人をたとうゆ
ふひ金二両残ゆ出一てゆくけきとゆくとうり

て受きりけきい詮方ゆ耶の銭残ゆくけきくゆ受ゆ一受
ゆて走ゆ彼人其夜胴巻を造せ是ゆい肌ゑ巻て
暮ゆ一ゆ二日過て例のくく朝くく発一道の程二里ゆま
ゆも来ゆたゆ付て則肌残探ゆゆい形一ゆ如何ゆくたと
ゆゆくゆ一ゆ霜ゆる風呂ゑ入くく湯殿ゑ入て置其侭ゑ
ワゆれゆるゑ付ゆうけるゆくい此金ゆ吾ゑ縁ゆきものゆう
んくく思ひゆきめゆくゆ供の男ゆ志ゆくめゆ一残語ゆ旅ゆ
ゑ走ゆゆ一けるゑ僕いゆきて旅亭ゑいゆう浴室ゑ入ゆい
其侭ゆくゆありけきい亢てゆ一ゆれゆ是則其数ゆ
ゆ処ゆ一ゆ二度ゆうゆるひゆ二度ゆ一ゆめ二度ゆ一ゆ
ゆきゆ謂いゆけきど不思議ゆゆ一ゆ何事も自然ゆ
ゆくゆたひゆきめぬく語ゆきゆ一ゆいゆうゆ欲ゆ

恥辱名利貪欲の途に一生ゆくまの幸ひる天京ちる
明徳ゆむる〳〵機さんていいをうるてしを業るめ是ら
の事ゆ手演述ひゆ鮮と子孫〳〵ゆも諭しぬるかつなれも
ひすらす〳〵六諭衍義大意ゆ首書しさ〳〵梓行をうはあさ此
九人の事蹟ないさう説ゆ附しさ〳〵附録〳〵ゆしぬ此人このさ
ふすさふ梓行の書ゆ出〳〵普〳〵世の人乃ふるふゆる
ゆといへどをなゆ其事ゆ詳〳〵ふるし善ゆ好〳〵仁を心
さて人ゆも志りるかし〳〵其拙なゆ〳〵ふし〳〵業るまか
せめ者人其文の拙なゆ笑ふし其意け善美ゆらしのふ
ふ〳〵ゆうれ

首書画入 六諭衍義大意附録巻之下 大尾

跋

京人勝田知郷。遥寄所編謁余跋。乃通覧之。六諭衍義大意。増加附録二巻。係以國之欲使閭巷細民。目読而口誦之。留心於訓俗也篤矣。抑余父母國。為濃之巖邑。往年城主刻六諭大意。須布封内。因為郷之父

靜嘉堂

老。每自吉會村民。讀而論之。且乞曰。宣丈名村蒙師。別寫恢本以授童蒙。倘或罹火燬水腐。亦聽更乞。行之三年。封內童卅粗能識字。且了大意。皆通之如張遠然。乞行編加以附錄。則知至坪益卿伍。尤為不妙矣。余特舉至所試有實効以為証云。

弘化乙巳十月下澣

江都　一齋佐藤坦跋

佐藤坦之印　一齋

華仙梅壽書

梅壽

跋

京人勝田知郷。遥寄斯編謁余跋乃通覧之六諭衍義大意。増加附録二卷係以圖。意欲使閭巷細民目熟而口誦之。則其用心於訓俗也篤矣。抑余父母國為濃之巖邑。往年城主刺六諭大意頒布封内因命郷之父老毎月吉會村民讀而諭之。且令曰宜使各村蒙師。別寫臨本以授童蒙。倘或罹火燬水腐亦聽更乞行之三年。封内童丱粗能識字。且了大意。背誦之如歌謠然。今斯編加以附録。則知其埤益郷俗。尤為不尠矣。余特舉其所試有實効為証云

弘化乙酉十月下澣

聖堂附浙儒者

江都一齋佐藤坦跋

六諭遺話

此書ハ享保度　御公儀にて板行ゆ海内の士民家並にそれ〳〵自然と善道にうつりさらんとの御深慮にて文盲の事なれども中にある民家に他の国路指南の人を遣ひ御觸出をとりせ出ることをのあつかりこくもとく御上聞に達し有り難き御銀拾枚を六諭百部被下狂近村にも六諭の大意を弘ふと格別の御詞を賜ハり恐れ仰ぎ奉り厚志を奉慕此度此六諭の再彫を乞ひ御免を願ひ普く世に勧善をんと希ふ所なり

刻官　孝義録　五十巻　此ハ忠臣孝子貞婦義侠の人々を御紀の上聖堂に勧めて板行とゆ被ひ出されし幸久く伝ゆるとも名へ出る人ハ有りぞ少げんの切なるこそ

天保十四年癸卯十二月刻成

官許

弘化四年丁未五月増加

官許

京都新町通二條南
高量軒　勝田藏梓